

1. 親としての本能的な行為

父という字の成立

父という字は、古い字形は  で、手に杖を持った形を表したものです。人を指図したり教導する者が手にするもので、いわば

「権威の象徴」です。従って、父とは、「一家を率い、家庭を教え導く家長」を表した字です。

父はまた、“政”や“教”の“父”とも同じ構造です。「国民を正義に教え導く」ことが“政”であり、「わが子を教え導く」ことが“教”で、その「教え導く」という意味は“父”の部分にあるのです。

今、教育と言えば、すぐに学校とか教師とかを思い浮かべますが、教育とは、本来、親の子に対する本能的な行為であって、そのことを漢字の成立がよく表しています。

人はこの人生において、長い経験を通して、どうすればよいか、どうすればいけないか、いろいろと理解していきます。そういう経験から得た智慧を一つ一つわが子に伝え、少しでも失敗の少ない人生が送れるようにとする“親としての本能的な行為”が教育なのです。

親の智慧をわが子に授けることから、人間の智慧を専門に扱う学者にこれを委任することが効率の良い教育と考えられるようになって、今の学校教育の形に発展してきましたが、やはり真の教育は親のものだと私は思います。

しかし今の教育は親が子供に対して甘い存在になってきています。その基盤として、古い話になりますが、「敗戦による自信の喪失が、親としての教育の拠り所にも及んで、わが子をどのように教育していったら良いのか全く判らなくなってしまった」ということが考えられます。

それまでの厳しい躰教育に代って、新しく登場した考え方は、その反動として「親の考えを子供に押し付けてはいけない。子供の意志を尊重し、子供の望むままに伸び伸びと育ててやるのがよいのだ」という放任主義でした。

この放任主義は、自信を失った親たち、どう教育していったら良いのか判らない親たちにとって、この上もない魅力的な方法でした。どんなに自信のない親でも、これなら、自信をもって行えるのですから。

しかし、放任が教育であるはずはなく、放任しておいて子供が立派

に育つわけがありません。そこで、あわてて教育入門書をあれこれとかじっては行き当たりばったりやってみますが、これでは子供はますますだめになるばかりです。

こういう例が、この頃非常に多くなっています。以前私が勤めていた研究所のようなところは、全国にも至って教が少ないせいか、教育

コ ラ ム

諺

教学 相長ず

人間は教えることと学ぶことの両方で磨かれるものである、ということをお教えた良い言葉である。私は小学校の教師になり、「漢字はかなよりも覚え易い」こと、「漢字を覚える能力は一年生が一番高く、学年が進むにつれて低くなる」ことなど、それまでの常識を覆すいくつかの事実を発見した。しかし、発見したと言うよりむしろ「子供たちに教えたことから逆に子供たちから教えられた」と言った方が適切な気がするのである。私たちは子供たちに教えると同時に、子供たちの反応に注意して子供から学ぶことが大切なのだ。

相談に訪れる親が多く、こうした親が非常に多くいました。

二つの原因

転校しても困らない

富士の登山には、いろいろな登山口があるように、子供の教育法にも当然いろいろな方法があります。そのどれが良いのか

は、一概には言えないものがあります。しかし、自分はこうと決めたら、とことんそれで押し通すことが大切です。

あれこれと迷うのは、御殿場口から登りかけて、吉田口に変えるよう

コ ラ ム

諺

教学 相長ず

【教】 古い字形は𠂔。𠂔は、子供の周囲が閉ざされていて、視力が遠くに及ばない状態、つまり「無知」の状態にある子を表している。𠂔は両手の形。よって𠂔は、「父と子と交わって、父が子の無知を取り除いて賢くしてやる」ことを表している。

【学】 “𠂔(学・學)”という字は、父の手を借りずに自らの努力で、無知から脱して賢い人間になることを表した字。

なもので、教育の場合はもっとはなはだしい弊害があります。この「あれこれと迷う」自信のない親は、敗戦後に特にひどく見られるようになった現象ではありますが、その遠いきざしは「明治時代の義務教育」の施行にある、と私は見えています。

すでに述べましたように、教育は、親のわが子に対する本能的・必然的な行為ですから、法律的な権利義務というもので拘束すべき性質のものではありません。そういう道徳以前のものである教育を、道徳以下のものである法律によって拘束することにした「義務教育」は、明らかに教育の墮落と言わざるを得ません。

事実、義務教育が施行されるようになってからの親は、教育のすべてを学校に一任し、教師の蔭に退いてしまいました。ただ、家風を重んずるという伝統が残っていた戦前は、代々受継いできた家庭教育を捨て切ってはしませんでした。

ところが、敗戦を機に、家族制度が破壊され、古いものがすべて価値を失ってしまった時、親は全く“だめな親”になるよりほかなかったのです。

明治時代に由来するもので、義務教育と共に親をだめにする原因

となったものがもう一つあった、と私は考えています。それは、「職業世襲制の廃止」です。

子供の個性や能力を全く無視して、親の職業を無理矢理に継がせるということは、確かに良くないことです。しかし、それは、子が親の職業を継いだ

ほうが好い、ということから、継がないほうが好い、という考えに一変させてしまいました。隣の芝生は美しく見えるように、他人の職業は、人に解らぬ苦勞があってもそれが見えないので、良いところばかりが見えがちです。しかし、世襲制のころは、他人の職業を羨むのは愚かなことと考えられていて、一般に自分の職業を誇りに思う、という気風がありました。

ところが親の職業を継がなくても好いということになりますと、親はわが子を少しでも楽で体裁の良い職業に就かせたいと考えるようになり、自分の職業を誇りに思うどころか、親は子に向かって「こんな悪い職業は俺の代限りで結構。お前はもっと良い職業を選べ」と言うようにさえなっていました。

しかし、本来、子は親に似るものであり、子は親の性格も能力もそ

っくり受継ぐものです。だから、子は親の職業を受継いだほうが成功する確率が高いのです。

私には子が二人あります。長男は、宇宙ロケットの開発に従事しております。長男が大学に進む時、私は「自分の心からやりたいと思う道に進みなさい」と言って、子供の選択に任せました。

しかし、長男にはなかなか職業の選択は困難だったのです。結局は、大学院で宇宙ロケットの研究をし、その結果その道に進んだのですが、それは本人の心からの希望ではなくて、指導教授の奨めによるものでした。

下の子は娘ですが、私はこの子に対しても「自分の心からやりたいと思う道に進みなさい」と言っておりました。大学受験の時、学校の成績を調べてみますと、最も優れているのは国語科で、とりわけ漢文でした。

この時、私は初めて痛感しました。「蛙の子は蛙と言うが、親の得意なものは、自然と得意になるものだ。この得意なものを一層磨いて一層得意にすることを考えないということは何という愚かなことか」と。

娘に希望を尋ねてみますと、「医者になりたいので理科に進む」と

言います。私は「お前の成績は、お父さんの専門とする漢文が最も優れている。この最も得意な学問を一生の仕事としてやっていくのが、最も良いのではないか」と忠告しました。

娘は、私の希望通り、大学で中国文学を専攻しました。娘は父親の知識を利用することが出来、父親の私も、娘と共通の話題が多く待て、娘が父親と同じ道を歩んでくれたことは、本当に良いことだったと思っています。

コラム

豆知識

父母の意味

【父】 漢字の一番古い解説書である「説文解字」によると、古い字形は「𠂔」で、手の形(又)と杖の形(ノ)との合字。しかし、それは杖ではなく、「斧」だと思ふ。なぜなら、「斤」が斧の本字で、それが斧の形を表し斧の“父”は、発音がフであることを表す音符だから。

【母】 女に、乳房を表すしるしを加えた指事字。しかし説文解字には、女という字を基に作られた、婦人が乳児を抱いている形を象ったものとある。